

博物館 / 美術館ができることはまだまだある！

金澤 咲

兵庫県立美術館ミュージアムティーチャー



私は、昨年からは兵庫県立美術館の教育普及グループで働いており、子どもたちに向けて対話型で作品を鑑賞するプログラムも実践している。兵庫県立美術館に学校団体で来る生徒のほとんどが小学校4年生以上である。なぜか。私が働きながら、考えた理由が2つある。ひとつは、低学年は美術館でのマナーを守り、作品を鑑賞することがまだ難しいからという理由があげられる。学校側も低学年から美術館に生徒を連れて行くには、事前指導や人手もより多く必要なので、実現が難しいのだと思う。ふたつめは、小学校3年生以下の発達段階の子供たちは、人の意見を「きく」そして「考える」ことが、まだ充分には出来ないのではないかと考える。以前に1年生の出前授業に行ったとき、彼らは作品をみてたくさん発見をしてくれた。ある意味、高学年の生徒以上に意見をだしてくれた。一方で、「自分の意見を言いたい！」という思いが強く、他の友達の意見を「きく」ということが、まだ難しいようだった。その経験から、幼稚園や保育園の園児を対象に対話型で作品鑑賞をするということは、今まで考えたこともなかったし、今回、京都大学総合博物館での取り組みを聞いたときは、「プログラムとして成り立つのか」と疑問に思っていた。しかし、未就学児だからといって対話型鑑賞ができないと決め付けるのではなく、人の目を気にせず作品を鑑賞できる環境をつくったり、少人数で作品を鑑賞することで就学前のこどもでも「きく」「かんがえる」ことは出来るのではないのだろうか。本プログラムは、環境や仕組みを変えることで、今まで難しいと思われていた未就学児への鑑賞のプログラムが成立するのかを実証した試みでもあったように思う。

来館した園児は就学前の年長組(この春から小学生)で、プログラムは休館日に実施された。一般のお客さんはおらず、周りを気にして静かにする必要もない。児童も教員ものびのびしながら作品を鑑賞できる環境だった。そして、一度に作品を鑑賞する人数を少なく設定した。兵庫県立美術館では、20~30名(学校でいうと1クラスの人数)で対話型鑑賞をするのが一般的(というか、現実的)だが、今回はできるだけ全員が発言できるように、8~10名程度の少人数グループに分かれて、ボッティチェリの「春」を鑑賞した。

まず、私が「できない」と思い込んでいたことはすぐに覆された。子どもたちは、見えたものについて話し、ナビゲーターの「絵のどこから/どうしてそうおもったの?」の問いかけに、きちんと考えて答えていた。そして、「くんが言っていたことに付け加えて」「ちゃんはこちら思ったって言っていたけれど、僕は違うと思う」と、他の意見に自分の考えを積み重ねて作品を鑑賞したグループもあった。これには驚いた。ナビゲーターの質問は基本的に「何が見える?」「どこからそう思う?」「他の人はどう思う?」の3つだけである。それを徹底しているからこそ「自分の好きなように作品をみていいんだ」と園児が感じたのかもしれない。また、今回、板井さんが行ったナビゲーションは、園児の意見を受け入れることを重要視していて、次も言いたいと思うような関わり方をしていたように思う。例えば、児童を名前で呼ぶ、意見を聞いたあとに「ありがとう、よく気付いたね」と褒めることなど、小さなことだが、それがこの場所(美術/博物館)ではどんな意見を言ってもいいんだ、作品をみることに正解がないということを体感することにつながっていると思った。全部で4グループに実施したのだが、最後のグループは前に乗り出して絵にくいつき、ほぼ全員が意見を言いたくて仕方ないという熱い空気になっていた。



今回のプログラムを通じて、環境や仕組みを少し工夫することで、就学前の児童に向けても対話型鑑賞はできるという実感を得た。ただ、各地の美術館で実践していくとなると、実際に休館日に特別開館できるような美術館がどれほどあるのか。少なくとも、人件費や光熱費の関係で兵庫県立美術館は今のところ難しいのが現実である。今回のプログラムは柔軟な運営を実践されている京都大学総合博物館だからこそ出来たことなのかもしれない。ぜひ今後も、地域の幼稚園／保育園を対象にこうした取り組みを継続して頂き、普段はなかなか博物館／美術館に行きづらい子供たちに向けた休館日の鑑賞プログラムが実践、研究が出来たら素晴らしいと思う。ともすれば、京都大学総合博物館の試みを通じて、他の博物館や美術館も変わっていくかもしれない。

今、多くの博物館／美術館が子どもや学校に向けての教育普及を考えているだろう。しかし、現状はお金も人手もない場合が多い。その中で、いかに工夫し、実践し続けて行くかにかかっていると私は思う。なので、研究機関でもある京都大学総合博物館が実践し、未就学児および低学年への取り組みが重要だと証明できるようなことがあれば、日本での「教育普及」という枠組みが考え直されるきっかけになるかもしれない。もしかしたら、お金がかかったとしても、休館日を未就学児に来てもらおうと試みる館がでてくるかもしれない。そのような事例が起これば、まわりにも波及していくだろう。まさに希望である。

とはいえ、今ある環境の中で未就学児および低学年向けのプログラムを開館日に実現させていくとすれば、園および学校の先生の協力が不可欠だと強く感じる。一般のお客さんがいることで、「静かにみないといけない」「作品をみているお客さんの前を通ってはいけない」という「いけない」事柄が多く、何も知らずに来て怒られると、やはり博物館／美術館は行きづらいとなりかねない。なので、事前にどういう意図で館に来てもらうのかを先生と共有したり、園や学校の授業の時間を使って館でのマナーについて事前学習する時間をつくってもらったり、対話型鑑賞を経験したことの無いグループは、先生と一緒に作品をみる時間をつくるなど、こちらからもプログラムを提案することで、より博物館／美術館を楽しんでもらうきっかけづくりができるのではないかと感じた。

なぜ、子供に博物館／美術館を楽しんでもらうことが大切なのか。もちろん、子どもは未来の来館者であるし、学校や幼稚園の行事で楽しい体験をすれば、また親と一緒に来るかもしれない。それも重要だが、来場者数を増やすことが一番ではないと私は思う。たった1回きりの美術館での活動が、子供たちにしてあげられることは限られているかもしれない。しかし、作品の情報を与えるのではなく、作品を自分の目でみて、友達と話し、考える対話型鑑賞を体験すると、作品をみるときの姿勢は変わってくる。最初は作品の情報やタイトルばかり気にしている子どもが、対話型鑑賞をしたあとは、子どもたちだけで作品をみて、あれこれ意見を言いながら鑑賞をはじめるケースをよく見かける。

情報に頼りがちな現代社会や、正しいことを言わないといけないという価値観が根付いている学校や社会に対して、「自らの目でみて考える」ということは、今一番欠けていることなのではないだろうか。学習指導要領では何年も前から「生きる力」を提唱しているが、

学校現場が変わっていくのは難しい。そうであれば、学校以外の教育機関である博物館や美術館が介入する必要があると私は思う。私は、今回このプログラムを経験して、もしかしたら、博物館／美術館での対話型の鑑賞が、今、日本が抱えているさまざまな教育問題を解決する糸口になるのではないかという希望を抱いている。

